

日本野球（プロ／アマ合同）の 2026 年度 公認野球規則（日本野球規則委員会発表）における主な改正点と、その意図・影響を整理しました。改正は 27 項目にわたっています。[野球日本+2NPB.jp](#) [日本野球機構+2](#)

## 主な変更点(目立つポイント)

以下、特に注目される改正内容と、その背景・意図を解説します。

### 1. ハイブリッド・ポジション(Hybrid Position)の導入

- 投手が 球審に申告することで、セットポジションの足の置き方(軸足を投手板に平行に、自由足を前)から ワインドアップ・ポジションへの移行が認められる。[nikkansports.com+1](#)
- これまでは、同じ足の配置でも「ワインドアップに移行＝投球動作の変更」とみなされて、ボークになるケースがあった(例:DeNA のバウアー投手)。[nikkansports.com+1](#)
- この申告制度によって、投手はより自由なスタイル選択が可能になり、戦術的な柔軟性が増す。

### 2. 悪天候時の試合打ち切り(中断)ルールの明文化

- 4.03 条に「30 分を待たずに試合を打ち切ることができる」という文言を追記。[NPB.jp](#) [日本野球機構+1](#)
- 背景には、近年の異常気象や予報精度の問題があり、実務上の対応を明確化する狙いがある。[nikkansports.com](#)

### 3. 「だます目的でボールを隠す行為」へのペナルティ強化

- 5.06(c)(7) の原注に、新たに記載。具体的には、野手が走者をだます目的で ユニフォーム(例:ズボンのポケット)にボールを隠す行為をした場合、審判員がタイムを宣告して、すべての走者に「少なくとも 1 個の塁」を与える。[野球日本](#)
- これはフェアプレー性を高め、不正行為への抑止力とする狙い。

#### 4. 投球モーションの制限／明確化(ボーク関連)

- 5.07(a)(1)、(a)(2) の文章を修正。改正後は「投球に関連する動作を起こしたならば、中断・変更せずに投球を完了しなければならない」と明文化。[野球日本](#)
- 具体的には「ストレッチ(セット)からwindアップへの転換」「投球モーション中断・送球への切り替え」などが制限される。[NPB.jp 日本野球機構](#)
- ただし、windアップ申告をしている場合には、条件付きでポジションを戻す選択肢も許されており、柔軟性も持たせられている。[野球日本](#)
- 

#### 5. 送球(けん制)時の動作制限

- 5.07(d)を改正。投手は「ストレッチを起こしてからでも、打者への投球動作を起こすまでならいつでも塁へ送球できる」が、「送球する前に直接踏み出す方向は送球先の塁方向でなければならない」と明記。[野球日本](#)
- これはけん制時に投手が不自然な動きをしてアウトを狙う行為(ある種の“ごまかし動作”)を抑える趣旨。
- 

#### 6. 走者が打球に触れた時のルール強化

- 5.09(b)(7) の改正で、内野手が股間や側方を通過する前のフェアボールに走者が触れた場合(且つ他に守備機会がないと認められる場合)、ボールデッドとし、得点や進塁を制限すると明記。[野球日本](#)
- インフィールドフライが宣告された打球の場合でも、特定の条件下で「打者・走者ともにアウト」となる条項が強化されている。[野球日本](#)
- これは、フェアボールを利用した奇襲走塁などを防ぐための整備と考えられる。
- 

#### 7. マウンド訪問(監督・コーチがマウンドへ)制限の強化

- 5.10(l) に“監督またはコーチがマウンドに行った際、投手が他の守備位置に移ったかどうかに関係なく、そのイニングでその投手のもとへ1度行ったことになる”という文言を追加。[野球日本](#)
- つまり、イニング中のマウンド訪問回数をより厳格に扱うことで、投手への過度なインタラクト(アドバイス／指示)を抑える狙い。

8. 「肉体的援助(physical assistance)」の表記変更
- 三塁／一塁のベースコーチが走者に触れる／つかむ行為(過去は「肉体的援助」と記載)を、「アシスト(assisting)」という表現に改め。[アメーバブログ\(アメブロ\)+1](#)
  - 言葉を柔らかくしつつ、同様の行為があった場合の扱いを明確にする。
  -
9. 捕手のオブストラクション(妨害)に関する明文化
- 6.01(h) 付記事項を改め、捕手は ボールを持っていないときには、走者の進路を塁線上に「ふさぐ」権利がない、という規定を明記。[野球日本](#)
  - つまり、捕手が塁線上で不適切に立つことで走者の進路を妨げる行為を制限。
  -
10. アマチュア野球内規の整理
- アマチュア内規から、「3. ワインドアップポジションの投手」と「13. 正式試合となる回数」という項目を削除。[野球日本](#)
  - つまり、“ワインドアップを前提とする規定”をあえて定義しない形に変え、申告によるハイブリッドポジションの適用を明確に許容する構造へ。[ジャバ+1](#)

## 意図・背景・影響の考察

- **戦術と自由度の向上**  
ハイブリッド・ポジションの導入は、投手にとって選択肢を増やす大きな改正です。従来は「足の配置」などで制限があった投球スタイルの柔軟性が高まり、起用幅や戦略の幅が広がります。
- **公平性・反則防止**  
ボールを隠す行為へのペナルティや、けん制時の不自然な動作制御などはフェアプレーを強化する項目です。不正や“ごまかし”プレーを抑えてゲームの正統性を保つ狙いがあります。
- **安全性・競技健全性の維持**  
捕手のオブストラクション制限は、走者を不当に妨害するリスクを低減でき、選手安全やプレーの健全性につながる可能性があります。
- **実務対応の現代化**  
天候による試合中断・打ち切りルールの特典化は、予報技術や異常気象を踏まえた、実務的な運営対応力の向上を目的としていると考えられます。

## 2026 年 公認野球規則改正 (条文ベースまとめ)

以下は主な改正点を、該当条項(規則番号)ごとに分けて整理したものです。

規則(条文)	変更内容
2025 年 米国オフィシャル・ベースボール・ルールの改正に伴う規則改正	
5.02(c)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(c)(i)から「投球動作および」の文言を削除。</li> <li>・(c)(ii)の文を修正。「4 人の内野手のうち、2 人ずつは二塁ベースの両側に分かれて、両足を位置した側に置いていなければならない」と明記。</li> <li>・違反時のペナルティ前段を修正。「最初にボールを触れた内野手が…」の場合の取扱いや、打者や走者への塁付与などを明記。</li> <li>・原注(ペナルティ原注)を追加し、プレイ継続後の扱いについて明文化。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a></li> </ul>
米国オフィシャル・ベースボール・ルールとの比較検討により再確認した項目の改正(主にこれまで不記載としていた項目の追記および文章の修正)	
5.06(c)(7) 原注	走者をだます目的で野手がボールをユニフォーム(例:ズボンのポケット)に隠した行為に対して、審判がタイムを宣告し、「その瞬間に占有していた塁から少なくとも 1 個の塁」を走者に与える。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構+1</a>
5.07(a)(1)	<p>投球に関する動作を起こしたら、それを中断・変更せずに投球を完了する義務を明確化。改正によって中断・変更の禁止が強調されている。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a></p> <p>また、注釈を修正し、「両手を合わせたら投球以外の動作(送球、足ははずすなど)はできない。違反すればボークとなる」と明言。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a></p>
5.07(a)(2)	<p>文章を改め、中断・変更の定義をより明確化(windup ↔ setへの移行、送球動作への切り替えなどを「変更」と定義)。</p> <p>原注・注も追加/修正:投手がwindupで投球する旨を審判に伝えた場合、打者が打席に入っている間でもwindupを継続できる。アマチュア野球では、セットポジションに戻す場合も審判への申告が必要など。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a></p>

規則(条文)	変更内容
5.07(d)	ストレッチ(セット)から送球(けん制)を行う際、「送球する塁方向へ直接踏み出すこと」が必要と明記。これにより、不正確・ごまかしの動きを制限。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a>
5.09(b)(7)	<ul style="list-style-type: none"> <li data-bbox="434 483 1359 817">&lt;li&gt;本文を修正: 特定条件のフェアボールに走者が触れた場合を「ボールデッド」とし、進塁・得点を制限。具体的には「他の内野手に守備機会がない状態で、内野手の股間または側方を通過する前のフェアボール」に触れた場合など。&lt;/li&gt; &lt;li&gt;インフィールドフライが宣告された打球でも、条件によって「打者・走者ともアウト」になる場合を明記。&lt;/li&gt; &lt;li&gt;注 2 を改定、注 3 を削除し、他の注を繰り上げ。特に「反転したボールに触れた場合」の走者アウトへの扱いを明確化。&lt;/li&gt;&lt;/ul&gt; <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a> </li></ul>
5.10(l)	原注の第 5 段落を追加。監督またはコーチがマウンドに行った場合、イニング中にその投手のもとへのマウンド訪問は「1 回」とみなされる(投手が他の守備位置に移動したかどうかに関係ない)。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a>
6.01(a)(8)	ベースコーチ(一塁または三塁)が走者に触れたり、つかんだりして走者の離塁・帰塁をアシストしたと審判が認めた場合の規定を「アシスト(assisting)」という表現に変更。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a>
6.01(h)(付記)	捕手がボールを持っていないときに走者の進路をふさぐ(オブストラクション)行為を制限。「捕手は、ボールを処理中または保持中以外では、塁線(ベースライン)上に立ってはいけない」と明記。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a>
6.02(a)(1)	投手が投手板に触れていて、投球関連動作を起こしたあと中断または変更して投球を完了しなかった場合の記述を修正。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a>

規則(条文)	変更内容
<p>その他、日本野球規則委員会で協議した項目の改正            (「プロ野球・プロフェッショナルリーグ」表現の削除、修正。【注】の追記、修正等)</p>	
3.02(a)	<p>「プロフェッショナル野球(公式試合および非公式試合)」という文言を削除。注1・注2を修正:「NPBでは金属製バットなどは許可が必要」「アマチュア野球では所属団体規定に従う」旨を明記。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
3.02(d)	<p>着色バット(カラー付きバット)について、規則委員会の許可がなければ使用不可と明記。注を統合/修正。また、規定違反バット(改造バットなど)に対する扱いを明確化。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
3.03(j) 注1	<p>注1を修正。「NPBでは本項を適用しない」旨を明記。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
3.08	<p>本文および(b)の「プロフェッショナルリーグ」「メジャーリーグ」といった表記を削除。より中立的な表現に修正。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
3.09	<p>本条の「プロフェッショナルリーグだけに適用される」との文言、および付記中の「プロ野球」などの表現を削除。注4を改訂し、「所属する団体の規定に従う」ことを強調。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
4.03(e)	<p>注を追加。「天候状況によっては30分を待つことなく試合を打ち切ることができる」と明記。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
5.08(b)	<p>注の最終段落を改正。打者走者 または 三塁走者が進塁時に塁を踏み損ねた場合、守備側のアピールがあるときにのみ審判はアウトを宣告できる、という扱いを明文化。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
5.10(e)	<p>注を追加。アマチュア野球では所属団体の規定に従って適用する、という追記。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
5.10(g)(2)	<p>注を追加。「インニングの初めに準備投球を行った投手」について、国内(日本)では「インニング開始時に投手がファウルラインを越えてしまえば」など、適用上の具体的な表現を定める。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
5.10(k)	<p>注2を改訂。ベンチ(ダッグアウト)に入れる者について、国内では所属団体規定に従う旨を明記。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>
5.10(l)	<p>冒頭の“プロフェッショナルリーグは、”という文言を削除(より普遍的な表現に)。<a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a>  <a href="http://NPB.jp">日本野球機構</a></p>

規則(条文)	変更内容
7.02 注	注 1・注 2 を改訂。NPB に関する適用除外(注 1)や、アマチュア野球での所属団体規定順守(注 2)を明文化。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a>
8.01(b)	各審判員の権限を強調。審判はプレーヤー・コーチ・監督、クラブ役職員・従業員に対して規則の施行を命じ、必要があれば行動の差し控えなどを指示できる権限を持つことを明記。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a>
9.22 注	注を改訂。「NPB では‘組まれている試合総数’を‘行なった試合数’に、‘マイナーリーグ’を‘ファーム・リーグ’に置き換えて適用」「端数の処理については各原注に準じる」との具体的運用を明記。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a>
定義 38(2)	“リターン(RETURN)”の定義を削除。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a>
定義 64	“RETURN / リターン”の定義を削除。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a>
表記修正 (“打者” → “打者走者”)	以下の条項・定義で「打者」表記を「打者走者」に改め： 5.06(b)(4)(G)、5.06(b)(4)(I)、5.08(b)、5.09(b)(1)(2)、5.09(b)(6)、 5.09(c)(2)、9.05(b)(4)、9.12(f)(1)、定義 28(フィールダースチョイス)、 定義 30(フォースプレイ)など。 <a href="http://NPB.jp">NPB.jp</a> <a href="#">日本野球機構</a>

# ✔ 2026 年度 公認野球規則 改正まとめ (全文意訳・差分解説)

---

## 【1】3.02(a)[バットの規定]

### ●旧

- ・プロ公式／非公式試合に関する特別条項があった。
- ・使用可能バットの素材等の記述がプロ中心で構成。

### ●改正内容(日本野球規則委員会での改正)

- ・「プロフェッショナル野球(公式／非公式)」という限定表現を削除。
- ・注記を整理し、
  - － NPB は金属バットなどを使用する場合、NPB の許可が必要
  - － アマチュアは所属団体の規定に従うという団体別ルール適用を明文化。

## 【2】3.02(d)[着色バット／改造バット]

### ●旧

- ・着色バットの使用可否が複数の注記に分散。

### ●改正(日本野球規則委員会での改正)

- ・「規則委員会の許可なければ使用不可」と一本化。
- ・改造バット・違反バットの扱いを統合して整理した。

### 【3】3.03(j) 注 1

#### ●改正(日本野球規則委員会での改正)

- ・「NPB では本項を適用しない」と明記(NPB 独自ルールを保持)。

### 【4】3.08

#### ●改正(日本野球規則委員会での改正)

- ・本文および(b)の「メジャーリーグ」「プロフェッショナルリーグ」を削除。
- ・中立的な表現に統一。

### 【5】3.09

#### ●改正(日本野球規則委員会での改正)

- ・プロ野球に限定していた記述を削除。
- ・注 4 を改訂し「所属団体規定に従う」を強調。

### 【6】4.03(e)[悪天候による打ち切り]

#### ●旧

- ・「30 分待つ」旨が標準。

#### ●改正(日本野球規則委員会での改正)

- ・注記を追加し、30 分を待たなくても打ち切り可能と明記。  
→ 実務上の判断を柔軟化。

## 【7】5.02(c)[内野守備位置(シフト規制)]

### ●改正内容(大きな改定) 2025OBR の改正に伴う規則改正

- ① (c)(i) から「投球動作および」という語を削除し文章を簡潔化。

#### 改正前

(i) 投手が投手板に触れて、打者への投球動作および投球に関連する動作を開始するとき、4人の内野手は、内野の境目より前に、両足を完全に置いていなければならない。

#### 改正後

(i) 投手が投手板に触れて、打者への~~投球動作および~~投球に関連する動作を開始するとき、4人の内野手は、内野の境目より前に、両足を完全に置いていなければならない。

- ② (c)(ii) を再構成:

- 4内野手のうち2人ずつ二塁ベース両側に配置
  - 両足をその側に置く必要がある
- を明確に文章化。

#### 改正前

(ii) 投手が打者に対して投球するとき、4人の内野手のうち、2人ずつは二塁ベースの両側に分かれて、両足を位置した側に置いていなければならない。

#### 改正後

(ii) 投手が打者に対して~~投球のためにボールが手から離れた~~とき、4人の内野手のうち、2人ずつは二塁ベースの両側に分かれて、両足を位置した側に置いていなければならない。

- ③ ペナルティ部を改訂し、

- 最初に触れた内野手が誰かによって処理が分岐
- 打者／走者への塁付与が明確化

#### 改正前

ペナルティ 守備側チームが本項に違反した場合、投手の投球にはボールが宣告され、ボールデッドとなる。

ただし、打者が安打、失策、四球、死球、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が少なくとも1個の塁を進んだときには、規則違反とは関係なく、プレイは続けられる。もし、本項に違反した後に、他のプレイ（たとえば、犠牲フライ、犠牲バントなど）があった場合は、攻撃側の監督は、そのプレイが終わってからただちに、違反行為に対するペナルティの代わりに、そのプレイを生かす旨を球審に通告することができる。

#### 改正後(改正前青字部分が赤字に変更される)

ペナルティ ~~本項に違反した内野手が、投球後最初にボールを触れた場~~

合、打者はアウトにされるおそれなく、安全に一塁が与えられ、各走者もアウトにされるおそれなく、1個の塁が与えられる。ただし、打者が安打、失策、その他で一塁に達し、しかも他の全走者が少なくとも1個の塁を進んだときには、規則違反とは関係なく、プレイは続けられる。

本項に違反した内野手が、投球後最初にボールを触れた内野手でなければ、投手の投球にはボールが宣告され、ボールデッドとなる。

#### ④ 原注を追加し プレイ続行後の扱いを具体化。

【ペナルティ原注】本項のペナルティが宣告されてもプレイが続けられたときは、そのプレイが終わってからこれを生かしたいと監督が申し出るかもしれないから、球審はそのプレイを継続させる。打者走者が一塁を空過したり、走者が次塁を空過しても、〔5.06b3 付記〕に規定されているように、塁に到達したものとみなされる。

【注2】我が国では、本項後段の内野手の守備位置については、適用しない。

## 【8】5.06(c)(7) 原注〔ボール隠しの禁止〕

### ●新設(OBRを再確認しこれまで不記載項目の追加および修正)

- ・走者を欺く目的でボールをユニフォームに隠した場合、  
→ その瞬間の占有塁から最低1つの塁を与える。
- ・悪質な“隠し球”を排除。

従来の【原注】最終段落に追加

【原注】チップした打球が、球審に当たってはね返ったのを、野手が捕らえても、ボールデッドとなって、打者はアウトにはならない。チップした打球が、球審のマスクや用具に挟まって止まっても、同様である。

第3ストライクと宣告された投球が、捕手を通過して球審に当たったときは、ボールインプレイである。球審に当たってはね返ったボールが、地上に落ちる前に捕球されても、打者はただちにアウトにはならないボールインプレイであり、打者は一塁に触れる前に、その身体または一塁に触球されて、初めてアウトになる。

第3ストライクと宣告された投球または四球目の投球が、球審か捕手のマスクまたは用具に挟まって止まった場合、打者には一塁が与えられ、塁上の走者には1個の進塁が許される。

野手が、走者をだます目的で意図的にボールをユニフォームの中（たとえばズ

ボンのポケットなど)に隠した場合、審判員は「タイム」を宣告して、すべての走者に、そのような行為を行なった瞬間にすでに占有していたと審判員が判断した塁から少なくとも1個の塁を与える。

## 【9】5.07(a)(1)〔投球動作の中断禁止〕 windアップポジション

### ●改正(OBRを再確認しこれまで不記載項目の追加および修正)

- ①「投球関連動作を起こしたら中断・変更できない」をより強く明記。

#### 改正前

##### (1) windアップポジション

投手は、打者に面して立ち、その軸足は投手板に触れて置き、他の足の置き場所には制限がない。

この姿勢から、投手は、

- ① 打者への投球動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

#### 改正後

- ① 打者への投球に関連する動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

##### ② 注記を修正:

- 両手を合わせたら投球以外(送球・足はずし)不可
- 違反=ボーク

と明文化。

#### 改正前

【注】投手が投球動作を起こして、身体の前方で両手を合わせたら、打者に投球すること以外は許されない。したがって、走者をアウトにしようとして塁に踏み出して送球することも、投手板を外すこともできない。違反すればボークとなる。

#### 改正後

【注】投手が投球に関連する動作をして、身体の前方で両手を合わせたら、打者に投球すること以外は許されない。したがって、走者をアウトにしようとして塁に踏み出して送球することも、投手板を外すこともできない。違反すればボークとなる。

## 【10】5.07(a)(2)[投球動作の変更定義]セットポジション

### ●改正(OBRを再確認しこれまで不記載項目の追加および修正)

・投球動作の「変更」の定義を具体化：

- ワインドアップ ↔ セットへの移行
- 投球途中で送球に切り替える

なども「変更」と扱うと明確に書き直し。

・注・原注も改訂：

- ワインドアップを使う場合、球審に申告すれば継続使用可能
- アマチュアではセットに戻すにも申告が必要

→ 2026年最大の変更点：ハイブリッド投球ポジションの明文化

#### ① 5.07(a)(2)②

改定前

② 打者への投球動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

セットポジションをとるに際して“ストレッチ、として知られている準備動作(ストレッチとは、腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為をいう)を行なうことができる。しかし、(以下 略)

改定後

② 打者への投球に関連する動作を起こしたならば、中断したり、変更したりしないで、その投球を完了しなければならない。

セットポジションをとるに際して“ストレッチ、として知られている準備動作(~~ストレッチとは、腕を頭上または身体の前方に伸ばす行為をいう~~)を行なうことができる。しかし、(以下 略)

#### ② 【注1】

改定前

(1) (2) 項でいう“中断、とは、投手が投球動作を起こしてから途中でやめてしまったり、投球動作中に一時停止したりすることであり、“変更、とは、windアップポジションからセットポジション(または、その逆)に移行したり、投球動作から塁への送球(けん制)動作に変更することである。

## 改定後

(1) (2) 項でいう“中断、とは、投手が**投球に関連する動作**を起こしてから途中でやめてしまったり、投球動作中に一時停止したりすることであり、“変更、とは、windアップポジションからセットポジション（または、その逆）に移行したり、投球動作から塁への送球（けん制）動作に変更することである。

### ③ 【原注】の最終段落に次を追加するとともに、【注 6】、【注 7】を追加する。

#### 改定前

【原注】走者が塁にいない場合、セットポジションをとった投手は、必ずしも完全静止をする必要はない。

しかしながら、投手が打者のすきについて意図的に投球したと審判員が判断すれば、クイックピッチとみなされ、ボールが宣告される。6.02(a)(5)[原注]参照。

塁に走者がいるときに、投手が投手板に軸足を並行に触れ、なおかつ自由な足を投手板の前方に置いた場合には、この投手はセットポジションで投球するものとみなされる。

#### 改定後

【原注】走者が塁にいない場合、セットポジションをとった投手は、必ずしも完全静止をする必要はない。

しかしながら、投手が打者のすきについて意図的に投球したと審判員が判断すれば、クイックピッチとみなされ、ボールが宣告される。6.02(a)(5)[原注]参照。

塁に走者がいるときに、投手が投手板に軸足を並行に触れ、なおかつ自由な足を投手板の前方に置いた場合には、この投手はセットポジションで投球するものとみなされる。

**ただし、打者が打席に入る前に、投手がwindアップポジションで投球する旨を審判員に伝えた場合には、前述のような投球姿勢であったとしても、windアップポジションとして投球することができる。**

**投手は、打者が打撃中であっても、(i) 攻撃側チームにプレーヤーの交代があったとき、または(ii) 走者の位置が変わったときは、次の投球を行なう前であれば、審判員にwindアップポジションで投球する旨を伝えることができる。**

**【注 6】 windアップポジションとして投球する旨を審判員に伝えた後であっても、攻撃側チームのプレーヤーが交代したり、走者の位置が変われば、セットポジションに戻ることができる。**

**【注 7】 アマチュア野球では、セットポジションに戻るときも、審判員にセットポジションで投球する旨を伝えなければならない。**

## 【11】5.07(d)〔けん制の踏み出し方向〕

### ●改正(OBRを再確認しこれまで不記載項目の追加および修正)

- ・ストレッチから送球する際、  
→ 踏み出す足は必ず送球方向であることを明文化。
- ・不正や“ごまかし動作”を排除。

#### 改正前 (d)〈8.01c〉塁に送球

投手が、準備動作を起こしてからでも、打者への投球動作を起こすまでなら、いつでも塁に送球することができるが、それに先立って、送球しようとする塁の方向へ、直接踏み出すことが必要である。

#### 改正後 (d)〈8.01c〉塁に送球

投手が、ストレッチを起こしてからでも、打者への投球動作を起こすまでなら、いつでも塁に送球することができるが、それに先立って、送球しようとする塁の方向へ、直接踏み出すことが必要である。

## 【12】5.08(b)〔進塁時の塁踏み損ねの扱い〕

### ●改正(その他、日本野球規則委員会で協議した項目の改正)

- ・注の最終段落を改訂：  
- 打者走者／三塁走者の塁踏み損ねは  
守備側アピールが無い限りアウトにできない  
を明文化。

#### 改正前

##### 【注】

前段 (略)

打者走者または三塁走者が進塁に際して塁に触れ損ねた場合も、適宜な時間がたっても触れようとしなかったときに限って、審判員は、守備側のアピールを待つことなく、アウトの宣告を下す。

改正後

【注】

前段 (略)

打者走者または三塁走者が進塁に際して塁に触れ損ねた場合は、適宜な時間がたっても触れようとしなかったときに限って、審判員は、**守備側のアピールがあったときだけ、審判員はアウトの宣告を下す。**

## 【13】5.09(b)(7)[走者がフェアボールに触れた場合]

### ●大幅改訂(OBRを再確認しこれまで不記載項目の追加および修正)

①以下を明確に定義:

- 内野手の股間・側方を通過する前、さらに
- 他の内野手が処理不可能なフェアボールに走者が触れたらアウト

①インフィールドフライ時の特別規定も改訂:

- 条件下で「打者・走者アウト」となるケースを整理

②注2～注3を再編(1つ削除)。

① 本文の改正

改正前(走者アウト)

- (7) 走者が、フェアボールに、フェア地域で触れた場合。(5.06c6、6.01a11 参照)  
この際はボールデッドとなり、打者が走者となったために次塁への進塁が許された走者のほかは、得点することも、進塁することも認められない。  
インフィールドフライと宣告された打球が、塁を離れている走者に触れたときは、打者、走者ともにアウトになる。

改正後(走者アウト)

走者が、**1人の内野手の股間または側方を通過する前で、さらに他の内野手が守備する機会がない状態の**フェアボールに、フェア地域で触れた場合。

(5.06c6、6.01a11 参照)

この際はボールデッドとなり、打者が走者となったために次塁への進塁が許された走者のほかは、得点することも、進塁することも認められない。

インフィールドフライと宣告された打球が、**内野手を通過する前で、さらに他のいずれの内野手も守備する機会がないと判断される前に塁から**離れている走者に触れたときは、打者、走者ともにアウトになる。

② 【注2】改正、【注3】削除、【注4】以下を繰り上げ

改正前

【注2】塁に触れて反転したフェアボールに、走者がフェア地域で触れた場合、その走者はアウトになり、ボールデッドとなる。

【注3】一度塁に触れて反転したフェアボールが、ファウル地域で走者に触れた場合は、その走者はアウトにはならず、ボールインプレイである。

改正後

【注2】塁に触れて反転したフェアボールに**走者が触れた場合、フェア地域またはファウル地域に関係なく**、その走者はアウトになり、ボールデッドとなる。

~~【注3】一度塁に触れて反転したフェアボールが、ファウル地域で走者に触れた場合は、その走者はアウトにはならず、ボールインプレイである。~~

以降 【注4】→【注3】 【注5】→【注4】に繰り上げ

## 【14】5.10(e)

### ●改正(その他、日本野球規則委員会で協議した項目の改正)

・アマチュアは所属する団体の規定に従う。旨を【注】に追加。

## 【15】5.10(g)(2)[イニング開始時の投手の扱い]

### ●改正(その他、日本野球規則委員会で協議した項目の改正)

・イニング開始時の準備投球に関する日本国内の具体的運用を【注】追加。

(例:ファウルラインを越えたら特定扱いになる 等)

【注】 我が国では、本項にある“イニングの初めに準備投球を行なった投手、を”イニングの初めに投手が、ファウルラインを越えてしまえば、と置きかえて適用する。

## 【16】5.10(k)

### ●改正(その他、日本野球規則委員会で協議した項目の改正)

- ・ベンチ入りできる者の扱いについて「所属団体規定に従う」を明示。
- ・注2を改訂。

#### 改正前

【注2】ベンチあるいはダッグアウトに入ることのできる者に関しては、プロ野球では各リーグの規約によって定め、アマチュア野球では協会、連盟ならびに大会などの規約に基づいて定めている

#### 改正後

【注2】我が国では、ベンチあるいはダッグアウトに入ることのできる者については、所属する団体の規定に従う。

## 【17】【5.10ℓ原注】〔マウンド訪問のカウント〕

### ●改正(OBRを再確認しこれまで不記載項目の追加および修正)

- ・原注に「そのイニングで1回訪問した扱いになる」と明記。  
→ 投手が守備位置を変えてもカウントは消えない。

#### 改正前

【5.10ℓ 原注】監督(またはコーチ)が、捕手または内野手のところへ行き、その野手がそのままマウンドに行ったり、投手が、守備位置にいるその野手のところへ行ったときは、監督(またはコーチ)がマウンドに行ったものと同様に扱われる。ただし、1球が投げられた後、またはプレイが行なわれた後は、この限りではない。

以下 第4段落(最終)まで省略

#### 改正後

【5.10ℓ 原注】の第5段落(最終)に以下を追加

監督またはコーチがマウンドに行った際、投手が他の守備位置に移ったかどうかに関係なく、そのイニングでその投手のもとへ1度行ったことになる。

## 【18】6.01(a)(8)[ベースコーチの走者アシスト]

### ●改正(OBRを再確認しこれまで不記載項目の追加および修正)

- ・「肉体的援助」という表現を廃止し、  
→ “アシスト(assisting)” に用語統一。
- ・触れて戻した／進めたとみなされれば走者アウト。

#### 改正前

6.01(a)(8) 三塁または一塁のベースコーチが、走者に触れるか、または支えるかして、走者の三塁または一塁への帰塁、あるいはそれらの離塁を、肉体的に援助したと審判員が認めた場合。

#### 改正後

6.01(a)(8) 三塁または一塁のベースコーチが、走者に触れるか、またはつかんだりして、走者の三塁または一塁への帰塁、あるいはそれらの離塁をアシストしたと審判員が認めた場合

## 【19】6.01(h)[捕手のオブストラクション]

### ●大幅明文化(OBRを再確認しこれまで不記載項目の追加および修正)

- ・捕手は  
→ ボールを保持・処理中以外は塁線上に立つてはならないと明文化。
- ・実質的に「キャッチャーブロック」を厳しく制限。

#### 改正前

【付記】捕手はボールを持たないで、得点しようとしている走者の進路をふさぐ権利はない。塁線(ベースライン)は走者の走路であるから、捕手は、まさに送球を捕ろうとしているか、送球が直接捕手に向かってきており、しかも十分近くにきていて、捕手がこれを受け止めるにふさわしい位置を占めなければならなくなったときか、すでにボールを持っているときだけしか、塁線上に位置することができない。

改正後(【付記】の改正、末尾に【6.01h 原注】として「定義 50 オブストラクション【原注】」を移行する。)

【付記】捕手はボールを持たないで、得点しようとしている走者の進路をふさぐ権利はない。塁線(ベースライン)は走者の走路であるから、捕手は、ボールを処理しよ

うとしているときか、すでにボールを持っているときだけしか、塁線上に位置することができない。

【6.01h 原注】として「定義 50 オブストラクション【原注】」を移行

ここにいう“野手がボールを処理する行為をしている”とは、野手がまさに送球を捕ろうとしているか、送球が直接野手に向かってきており、しかも十分近くにきていて、野手がこれを受け止めるにふさわしい位置を占めなければならなくなった状態をいう。これは一に審判員の判断に基づくものである野手がボールを処理しようとして失敗した後は、もはやボールを処理している野手とはみなされない。たとえば、野手がゴロを捕ろうとしてとびついたが捕球できなかった。ボールは通り過ぎていったのにもかかわらずグラウンドに横たわったままでいたので、走者の走塁を遅らせたような場合、その野手は走塁妨害をしたことになる。

## 【20】6.02(a)(1) 投手の反則行為・ボーク

### ●改正 (OBR を再確認しこれまで不記載項目の追加および修正)

・投手板に触れて開始された投球動作の「中断・変更不可」を整理。

改正前

(1) 投手板に触れている投手が、5.07 (a) (1) および (2) 項に定める投球動作に違反した場合。

改正後

(1) 投手板に触れている投手が、投球に関連する動作を起こしながら、中断したり、変更したりして投球を完了しなかった場合。

## 【21】7.02 注 サスペンデッドゲーム(一時停止試合)

### ●改正 (日本野球規則委員会での改正)

・注 1: NPB はこの項の適用を変更する旨

・注 2: アマチュアは所属団体規定に従う

を明記。

改正前

【7.02注】我が国では、所属する団体の規定に従う。

改正後

【7.02注1】 NPBでは、本項を適用しない。

【7.02注2】 アマチュア野球では、所属する団体の規定に従う。

## 【22】8.01(b) 審判員の資格と権限

### ●改正(日本野球規則委員会での改正)

- ・審判の権限を強く明文化：
    - 規則の施行命令
    - 必要な場合、行動の抑制命令も可能
- と明瞭な文構造へ。

改正前

(b) 各審判員は、リーグおよびプロフェッショナルベースボールの代表者であり、本規則を厳格に適用する権限を持つとともに、その責にも任ずる。審判員は、プレーヤー、コーチ、監督のみならず、クラブ役職員、従業員でも、本規則の施行上、必要があるときには、その所定の任務を行なわせ、支障のあるときには、その行動を差し控えさせることを命じる権限と、規則違反があれば、規定のペナルティを科す権限とを持つ。

改正後

(b) 各審判員は、**所属する団体**の代表者であり、本規則を厳格に適用する権限を持つとともに、その責にも任ずる。審判員は、プレーヤー、コーチ、監督のみならず、クラブ役職員、従業員でも、本規則の施行上、必要があるときには、その所定の任務を行なわせ、支障のあるときには、その行動を差し控えさせることを命じる権限と、規則違反があれば、規定のペナルティを科す権限とを持つ。

## 【23】9.22 注〔勝率計算などの統計規程〕

### ●改正(日本野球規則委員会での改正)

- ・「組まれている試合総数→行った試合数」など、NPB 特有の解析方法を注記として明文化。
- ・端数処理も原注に準じるとした。

## 【24】定義 38(2)[リターン]

### ●変更(日本野球規則委員会での改正)

・“RETURN(リターン)”の定義 2 項目目を削除。

## 【25】定義 64[リターン]

### ●変更(日本野球規則委員会での改正)

・RETURN/リターンの別定義を完全削除。

→ 用語体系を整理。

## 【26】表記修正(打者 → 打者走者)

### ●変更箇所(日本野球規則委員会での改正)

5.06(b)(4)(G)【規則説明】、5.06(b)(4)(I)の 4 行目、5.08(b)の 4 行目、  
5.09(b)(1)(2)【原注】1 つ目の例の 3 行目、5.09(b)(6)【原注】の 5 行目と 8 行目、  
5.09(c)(2)【原注】2 つ目の例の 2 行目、  
9.05(b)(4)、9.12(f)(1)①、定義 28「フィールダースチョイス」  
定義 30「フォースプレイ」【原注】1 つ目の例の 2 行目と 6 行目

## 【27】アマチュア内規改正(日本アマチュア野球規則)

### ●削除(日本野球規則委員会での改正)

・「3. ワインドアップポジションの投手」

・「13. 正式試合となる回数」

→ 投球ポジション概念の整理とワインドアップ申告制度への整合。